

わたしがヒロインになる方法

Wakaba & Yuma

有涼汐

Seki Uryō

termity



エタニティ文庫

目次

わたしがヒロインになる方法

5

書き下ろし番外編

キールとモスコミュニケーション

359

わたしがヒロインになる方法

プロローグ

たとえ友人関係だったとしても、時折その友人をお姉ちゃんみたい、妹みたい、などと思うことがある。

特に男性が好きなのは、妹系の可愛い女の子が多いと鑑木若葉は思っている。そして物語のヒロインというのは、大体そういった妹系の女の子なのだ。

何故そんなことを思ったかという、今日の前にいる若葉の友人、宮野朱利がその妹系の女の子だからだ。

ふわふわと緩いパーマのかかった茶色のロングヘア、猫のように大きな瞳、ぷつくりとした唇。胸がないのが悩みだというが、全体的にバランスの取れたスタイルで、着ている服もお洒落ときた。

性格は明るく気さくで、同性からも好かれるタイプ。若葉もそんな朱利のことがとても好きで、会社の面接時に出会ってからこの四年間、ずっと一緒にいる。

一方若葉は、天然パーマのセミロングだが、髪質が黒くて重い。後ろ髪がギリギリゆ

るふわパーマに見えるのだけが救いだが、前髪は定期的に縮毛矯正をかけなければ野暮っなくなってしまう、鏡を見るのも嫌になるほどだ。

体型もファッションセンスも普通。性格は悪くないとは思いますが、特段いいわけでもない。朱利が物語のヒロインならば、自分はモブキャラか、良くてヒロインの友人あたりだろう。

女子力を高めるべく頑張っていた時期もあったが、現在は二十六歳にして色恋沙汰からは干され気味だ。

入社したばかりの頃は、若葉と朱利は研修の班が同じで常に一緒にいたため、よく比較された。当然若葉は朱利の引き立て役だ。

とはいえ朱利を嫌いになったことは一度もない。比較される度に若葉ではなく、朱利が嘔み付く勢いで怒ってくれたからだ。だから共に仕事をするのも、ご飯を食べに行くのも楽しかった。

あれは入社して一月も経たない頃。その日も若葉と朱利は、一緒に会社を出て夕食を食べに行くことにしていた。が、そんな新入社員二人……というより、朱利を待ち伏せしていた数人の男性社員からのお誘いを受け、彼らと飲みに行くことになった。

お店に行ってみると、少人数での飲み会ではなく、随分と大勢の人が集まっていた。

聞けばどこかの課の打ち上げに乗じて、社内色々な課から参加者が集まったらしい。男性の比率がやや高いものの、女性もそれなりにいた。

一時間ほどして皆にお酒が回り始めた頃、朱利を待ち伏せしていた男性社員の一人がにやにやと笑いながら、若葉に向かって言った。

「籬木って、朱利ちゃんの引き立て役みたいだよなー」

「おい、お前飲みすぎだろー！　かわいそうだってー！」

あなたも大概飲みすぎでしょうと突っ込みたくなるような、フオローにもならないフオローを入れる別の男性社員。

朱利の隣にいれば、こんな風に言われることはよくある。若葉は笑って流そうとしたが、その前に朱利が立ち上がり、男性社員達を見下ろして――

「若葉のいいところがわっかんないような男に、ちゃん付けて呼ばれたくないんですけど！　そんな男に口説かれても靡きませんよ!!」

と啖呵を切る。当然、場は一気に静かになってしまった。皆見た目の可愛らしい朱利がこんな怒り方をするとは思っていなかったようで、啞然としている。

「ちよおおつ、朱利!?　朱利もお酒回ってない!?」

「若葉も！　こんなことで傷ついちゃダメだよ!!　若葉は可愛いんだから!!」

「いって、わかったから。ほら、落ち着きなさいって」

「いいえ！　朱利ちゃんの言う通りよ！　可愛い子が入社して浮かれていますのかもしれないけどね、それで女性を比較して誰かを馬鹿にするような男はクズでしかないわ」

そう言っ立ち上がり説教を始めたのは、秘書課の野々宮凜子だ。有能で面倒見が良く、おまけに美人。多くの女性社員から慕われる存在だ。

「あんた達、今後同じようなことがあれば、女性社員全員を敵に回すと思いなさい！」

つまり、大勢の女性社員に慕われる凜子が敵とみなした者は、女子の敵！　ということらしい。それを聞いた男性社員二人は顔を青くしている。

若葉とて、まさか自分のことで、こんな騒ぎになるとは思っていなかった。守つてもらったにもかかわらず、つい慌てふためいてしまっ。

「相変わらずたっけえ声で話すな、野々宮は」

そこに割って入ってきたのは、低い、だがよく通る男性の声だった。

その声に、若葉はドキッとする。耳に馴染むように心地いい声なのに、何故かむずむずして、つい耳をさすってしまった。

と同時に、周りにいた数人の女性社員の口から黄色い声が上がった。

声の主は、高身長でスポーツマン体型、切れ長の目に鼻筋の通った、端正な顔立ちのワイルド系の男性だった。口調の荒さからは、いかにも「俺様」といった印象を受ける。凜子は男性の姿を認めると、腰に手を当てながら言い放つ。

「あ、御影に羽倉じゃない。何よ、悪いのはこいつらよ！ こいつらよ！」
 するとワイルド系の男性——御影の後ろから、爽やかな声の、これまた爽やかな笑顔をした正統派イケメン——羽倉も入ってきた。
 「聞いてたよ。まあ、春だし少しみんな浮かれ気味みたいだね。この二人には俺からよく言っておくから」

そう言っただけで羽倉は凜子を宥める。

二人は営業課の御影悠麻と、人事課の羽倉葵。ともに三十歳。若くして管理職に就くのではないかと噂されているこの二人は、見た目も社内トップなら、仕事の実力もトップと言われており、女性社員の間で知らない者はいないほどの有名人らしい。近くにいた先輩女性社員がそう教えてくれた。

そんな二人の登場に、問題の男性社員二人は居心地が悪そうにしている。続いて御影は、朱利と若葉にも目を向けた。

「……まったく、怒んのもわかるが、こいつらも一応は先輩社員なんだから、むやみに怒鳴るな。あと、そこのお前。お前は自分のこと言われたんだろ？ なら、自分で怒れ」
 髪を巻き上げ眉間に皺を寄せながら、呆れたように苦言を呈する。

「……失礼いたしました」

若葉と朱利は二人揃って頭を下げた。凜子は謝る必要なんてないとぷりぷりしていた

が、御影が言っていることは間違っていない。自分達は入社したばかりの新人だし、こんな風に毎回朱利に怒ってもらっていいのは、朱利が悪者になってしまう。自分でどうにかしなければ。

「御影さんひどいっす。一応って、一応って……」

「ああ？ お前らは、隅で反省しろ」

御影は、不満げな男性社員二人を足蹴にしてどかせ、そこに羽倉と一緒に座った。

二人とも頼んだビールを飲みながら、他愛のない話を始める。ビールを飲んで落ち着いたらからか、御影は眉間の皺も取れて、表情が少し柔らかくなった気がした。

若葉は先ほどのことを思い出す。彼のように面と向かって正しい言葉をくれる人はあまりいない。こんな男性もいるのだなと、若葉は思った。

それに御影の声は何故か、不思議と耳に馴染む。若葉は無意識にまた耳をささるのだった。

飲み会はその後つつがなく終わったが、これがきっかけで若葉と朱利を比較するような声はなくなった。また、朱利を怒らせると怖いという噂も広まった。

だからといって若葉の価値が認められたわけでもなく——

それどころか、二人の同期である山中がその時放った不用意な言葉によって、若葉の

立ち位置が決まってしまった。彼は、みんなの注文を取ったり、会計時にお金を集めた
りしている若葉に一言。

「鍋木ってお母さんみたいだよな。おかんって感じ」

即座に「同い年の子どもを持った覚えなんかありませんが？」と返したものの、以来
若葉イコールお母さんというイメージが社内内で定着してしまった。

お姉さんならともかく、若葉はお母さんと呼ばれるのが好きではない。つまり
は女子として見られていないということだからだ。特に男性にモテたいと思っていたわ
けではないが、入社したての若い娘にとつては本意なあだ名だ。

ともあれこれが、若葉を恋愛干されOLにした一つのきっかけだった。

第一章 ポートワインの意味するものは

入社して四年、社会人としての生活もすっかり身体に馴染んだ頃。

いつもは定時に仕事を終わらせて帰るのだが、三月上旬のこの日、若葉は後輩のミス
をフォローするため、残業をしていた。定時を一時間ほど過ぎ、残務の目処もたったの
で後輩を先に帰らせる。

それから一息つこうと、自販機に飲み物を買うに行くことにした。廊下を歩いていき、
自販機の手前にある角を曲がろうとした時、男性社員二人の声が聞こえてふと足を止
める。

「宮野さんって、羽倉さんと付き合ってるのかな？ 最近よく一緒にいるよな」

「さあ？ どうだろうな。でも、羽倉さんなら宮野さんも落ちるだろ」

この頃、朱利と人事課長である羽倉のことが周りでよく話題になる。まだ付き合っ
てはいないようだが、確かに最近朱利の口からは度々羽倉の名が出てくる。彼のこと
が気になるのかな、と若葉は思っている。が、若葉にそれを言いふらす気はない。聞
かれてもいつものようにかわすだけだ。そう思い足を進めようとしたが、続く会話にま

た足が止まる。

「なら、あの子は？ 宮野さんといつも一緒にいる子。あの子、いい子って聞いた」
 「あー、お母さんか。そりゃいい子だろ、お母さんって言われてんだから。まー、でも恋愛対象ではないな」

「そうなのか？」

若葉はため息をついて、どうしようかと考える。あんな話をしている中にこのこ出ていく度胸はさすがになかった。

「いい子」と褒められてはいる。けれどそれは人としてであって、女としてではない。

「お母さん、なんてあだ名、何故ついたのか。確かに面倒見はいいかもしれないが、お母さん」は普通ないだろう。

男性社員は近くに本人がいるとも知らずに、若葉がいかにお母さんっぽいかを話している。

飲み物は諦めようと元来た方向を振り返ると、いつの間にか営業課の御影が後ろに立っていた。若葉はぎよつとして思わず身体を後ろに傾ける。

御影は切れ長な目を細めて小さく微笑ほほえんだかと思うと、すれ違いざま若葉の頭をぐしゃりと撫なでる。そしてそのまま角を曲がっていった。

「あ、御影さんお疲れさまーっす」

「おー……」

男性社員と御影の会話が聞こえてくる。

「なんか御影さん、不機嫌じゃないですか？」

「別に。ただこんなところでそんな話していると、女子から総スカン喰らうぞ」

「え!? マジっすか!? こんぐらいで!？」

「お前らにとつたら『こんぐらい』でも、女子にとつたら違うだろ？ つーか、お前が

恋愛対象どうこう言える立場かよ」

「辛辣しんれつっすよー！ 御影さーん！」

（助けてくれ、た……!?）

若葉は首を傾げる。このまま立ち去って良いものか迷っていると、御影が戻ってきた。

「ほら」

「え、あ、……ありがとうございます」

通りすがりに手渡された、ペットボトルのアップルティー。若葉がよく飲んでいるものだ。それを御影が知っていたとは思わないが、素直に嬉しい。

四年前、飲み会の席で若葉を窘こまめた御影は、あの時の噂通り営業課の課長になっていた。

三十四歳、イケメン、課長。そして独身とくれば女子が黙っていない高スペック。口

は悪いが、仕事に対する姿勢は真っ直ぐで、他人に厳しいけれど自分にはより厳しい人。先ほど撫でられた時に感じた骨張った指の感触、相変わらず耳に心地よく馴染む声。それらを思い出すと顔が火照りそうになった。貰ったばかりのアップルティーで頬を冷やしなから自分のデスクに戻り、残っていた仕事を終わらせる。

会社を出てスーパーで買い物をして、一人暮らしをしているアパートへと帰る。会社から二駅、駅から徒歩十五分ほどの小さなアパート。オートロックではないので防犯面は少々心もとないが、今まで問題はなかったから大丈夫だろう。

三階建ての、三階角部屋2Kなので日当たりがよく開放感があり、結構気に入っている。

ご当地のゆるキャラキーホルダーのついた鍵を取り出して、家の中に入った。

通勤用の服を脱いで部屋着に着替え、それから夕飯と明日の朝のおかずを作る。夕飯を終え、洗い物をしてお風呂に入ったら、あとはテレビを見たり本を読んだり。一人暮らしの女子の生活なんてこんなもの。そしていつもの時間に起き、朝の支度をして家を出るのだ。代わり映えのしない日々。

若葉は今日の御影との出来事を思い出しながら、空になったアップルティーのペットボトルを机に置いて指先でつつく。コロンと転がったそれを、すぐに捨てることはできなかった。

翌朝、七時半ごろ。今日もいつもと同じように会社へと向かう。途中、会社の最寄り駅にあるカフェで紅茶を注文し、持参したタンブラーに入れてもらうのが若葉の日課だ。

「若葉、おはよう」

「あ、朱利おはよ」

この時間になると、カフェの近くでよく朱利と顔を合わせる。現在若葉は総務課の一般事務、朱利は受付に配属されているが、今もプライベートでは一緒に出かけたり、互いの家に泊まり合ったりする仲だ。

「そういえば、そろそろだよね？」

並んで会社に向かう途中、朱利がふと尋ねてくる。

「……何かあったっけ？」

「忘れてる……、そろそろ異動時期だよー。私は一応、部署希望は秘書課で出してるけど……」

若葉の会社では、毎年この時期になると異動希望申告書というものを提出する。個々の社員が自分の雇用状況やキャリアについて考え、希望の部署を申告することができる。もちろん通るかどうかは会社の判断に任せられるが。

ちなみに朱利は毎年凜子のいる秘書課を希望している。凜子とは四年前の飲み会以来、

若葉も朱利も仲良くしているが、朱利としては一緒に働くのが夢らしい。

「うちの受付の花が消えたら、嘆かれそう」

「顔しか見ないヤツは興味ありませーん。だいたいどいつもこいつも、黙ってれば可愛いのに。って何？　しゃべるなって？　息するなって？　私はお人形さんじゃないわよ」

「あー、はいはい。わかったわかった。朝からそんなに怒らないの」

朱利は、見た目と中身のギャップを普段から指摘されているらしく、ぷりぷりしている。

(それにしても、異動か……)

特にこれといって目指すものもない若葉は、これまで同様、一般事務で出している。

しばらくして会社に着き、朱利とは別れて自分の部署へと向かった。自席に座り身体を伸ばしてから、今日も頑張りますか！ と、心の中で呟いて仕事を始める。

と、昨日貰ったアップルティーの代金を御影に払っていないことに今更ながら気付く。本来ならば後で小銭を返しに行くか、代わりに缶コーヒーでも買って渡したいところだ。小銭だと、それぐらいいらないとと言われる可能性があるがあるので、缶コーヒーの方がいいかもしれない。

けれどわざわざ営業課に行って渡すとすると、多くの女性社員から敵とみなされる可能性がある。

何しろ御影はモテる。個人的な繋がりを持っているというだけで嫉妬しつとされてしまうのだ。女子の嫉妬は買わないに越したことはない。

そんなことを考えながら若葉は自分に言い聞かせる。

勘違いはしない。

期待なんてしない。

彼は自分のことなんて何とも想っていない。

御影が自分を気にかけているなんて、ありえないとわかっているけども勘違いしなくなるのが女子の心情。

若葉が御影を目で追うようになったのは、果たしていつからだっただか。最初は口調も態度も乱暴で苦手なタイプだと思っていたけど、親しい友人だという羽倉と話す時は表情が柔らかくなるので、そのギャップにいつも驚かされる。

それに、入社して二年目ぐらいだったろうか——何故か突然御影は、廊下で会うたびに若葉に構ってくるようになった。

綺麗な女性社員が寄っていったものらしくらりとかわすくせに、唯一若葉にだけは用もないのに話しかける。会話をしなくても、必ず獲物を狙うような目でこちらを見て、笑みを浮かべ、すれ違い様に頭を撫でてくる。気のせいかもしれないけど、昨日のよう

にさりげなく助けくれたりもする。

少しづつ、少しづつ、時間をかけて惹かれていった。
この感情が何という言葉で表されるものか、頭のどこかで気付いてはいる。けれど、心はそれを認めることを頑なに拒否していた。

その週の金曜日は、朱利と食事をしようとして約束していた。先にあがった若葉は、会社のロビーで朱利を待ちながらスマホを操作する。お店はすでに予約しているのであとは向こうに行くだけ。地図の画面を出したところで、ふと、すっかり暗くなった空を見上げる。

「星、全然見えないな……」

都会ではこんなものだろう。北海道など星が綺麗に見えるところに行つて、夜空を満喫してみたい。そんなことを考えていたら、朱利の声が聞こえた。

「若葉！ お待たせ！」

「あ、大丈夫だ……よ……？」

振り返ると、イケメン二人が朱利を挟むように立っていた。御影と羽倉だ。

物語によくある、イケメン二人が可愛いヒロインを取り合うパターン。そんなことを考えたが、それはともかく何故この二人がここにいるのだろうか。

首を傾げると、朱利は気まずそうな笑みを浮かべて謝罪してくる。

「ごめん、帰りに羽倉さんに捕まって」

「鈴木ちゃんとご飯行ってくつて聞いたから、良かったら俺もつて思つて。んで、こいつも誘つたの」

羽倉はにこにここと笑いながら御影を指さす。

「たく、いきなり人のこと捕まえて飯行くぞつて……。俺の予定は無視か」

「どうせ予定ないくせに、何言つてんだよ」
まさか脇役である若葉が、こんな主役級の三人と食事に行くことになるとは思ひもしなかった。

「ちよつと待つてね。お店に人数変更の電話するけど。最初決めていたところで平気？」

「平気、平気ー。あと羽倉さんと御影さんの奢りだからー」
朱利の発言に何も言わないところを見ると、二人ともそのつもりなのかもしれない……。いや、若葉とすればきちんと払うつもりではいるけれど。

辛い。四人でも大丈夫。との返事をお店から貰い、連れ立って歩き出す。途中、通りすがりの人達が、若葉達——ではなく、若葉以外の三人を振り返っていく。脇役の若葉としてはいたたまれない。

「あ、御影さん」

「ん？ なに？」

ふと立ち止まり、隣を歩いている御影に声をかける。一応ヒールを履いているのに、身長差ゆえに見上げなければならぬ。

「先日は飲み物ありがとうございました。これ、お礼です」

そう言って鞆かぶとから取り出した缶コーヒ缶ーを差し出す。

「……は？」

「えっと、アップルティーのお礼です。缶コーヒ……」

今から食事に行つて帰宅するというタイミングで渡すのは憚はばられるが、これを逃せばもう渡せる気がしない。

「ああ……って、今渡すか？ 月曜日に会社で渡せよ」

「あの、その、飲み物貰つた次の日から鞆かぶとに忍ばせてたんですけど！ 渡すタイミングが見当たらず……、すみません」

若葉としても、朝出社した時か休憩時間に渡すのが一番だとわかっている。

部署やフロアが同じならばそれでもできただろうが、朝は出社時間が違うし、休憩時間は人の目があるので渡しづらい。結果こちらの都合を押し通す形になり、申し訳ない気持ちになつてしまう。

「……しようがない。ま、好きなメーカーのやつだしいいか」

その辺りはあまり突っ込んで考えないでほしかった。よく飲むメーカーを知っているなんて、御影のことをしっかり見ているというアピールのようで。そう思いながらも平常心を保つ。

「ていうかお前、これずっと持ってたのかよ……」

「はい！ あ、賞味期限は大丈夫ですよ！ 余裕です、余裕！」

「いや、そんなことはどうでもいいんだが。まあ、ありがとな」

御影はそう言つてかすかな笑みを零こぼし、若葉の頭をくしゃつと撫なでた。

その仕草があまりにも自然で優しくて——また、したくもない勘違いをしそうになる。

「おーい、二人とも何してんの？ 遅いよ」

「うるさいな、お前らが速いんじゃないのか？」

気が付くと、前を歩く羽倉達との間に随分距離ができていた。急いで追いかけてようとすると、隣を歩く御影にその様子はない。

結局御影の速度で共に歩く。傍はたから見れば羽倉と朱利、御影と若葉という二組のカツ

ブルが歩いている状態。そのまま二人でぼつぼつ会話をし、あとは心地のいい沈黙の中を歩いた。

こうしていれば、恋人同士に見えるだろうか。一瞬そんなことを考えるが、すぐに打ち消す。

もう、恋なんてしたくない。二度と、あんな思いを味わいたくはない。

(傷つのが怖くて怖くて堪らない……)

こんなことされると、まるで自分が特別扱いされている気分になるけど、その度に過去の恋愛が頭を過ぎり、心が逃げてしまう。きっと御影は自分のことを妹のように思っているだけだ。それ以外に、構ってくる理由なんて見つからない。

今までの経験上、女として見られていると自信を持って言うことができない。自分なんて、と自分を卑下する言葉が当たり前のように出てくる。

そんな自分が嫌になるものの、染み付いてしまった癖はなかなか抜けない。

「あ、あった」

「地下か？」

繁華街とは逆方向の、やや人気ひとけの少ない通り。そこで光る、淡い色の看板。ドアを開くと地下へと続く階段があった。先頭の御影に続いて若葉達も階段を下りる。途中、朱

利が注意を呼びかける。

「若葉、落ちないでね」

「落ちないよ、私は子どもか」

「だって、若葉いつも足元不安定だから。階段上れば靴引っかけるし、下りれば落ちそうになるし……」

「……否定、できません。すみません」

「くくっ、鍋木ちゃん面白すぎ……!」

羽倉は何がツボだったのか、一番後ろで口元を覆いながら笑っている。

店に入ると、落ち着いたオレンジ色の空間に、趣味のいい洋楽が静かに流れていた。

「予約してた鍋木だ」

「鍋木様ですね、こちらへどうぞ」

若葉が返答する前に、御影が先に名乗ってしまう。大したことではないんだろうけど、自分の苗字を名乗られたことに何故か照れてしまった。

店内は南国を思わせる落ち着いたリゾート風のインテリアで、案内された席は半個室型。入り口にはアジアンテイストのレースカーテンがかかっている。これを下ろしてしまえば顔は見えなくなるから、人に注目されることはないだろう。

男性陣おんがに促されるまま奥に座ると、隣に御影が腰を下ろす。向かいには朱利が、そし

てその隣には羽倉が座った。少し隙間があるとはいいえ、隣に御影が座っていると思うと少々緊張してしまう。

若葉はメニューを開き、ドリンクのページが全員に見えるようにして置く。

「何飲む？」

「生ビール」

「御影さん……せっかく来たんですから、お店オリジナルのとか飲みませんか？」

朱利が呆れたような声でリゾート系のドリンクを薦めるが、御影の意志は変わらないようだ。諦めて他の三人だけで、お店お薦めのオリジナルドリンクを注文をする。羽倉が頼んだムーンナイトはジンとソーダのカクテル、朱利が頼んだシーサイドはライムとグレープ、そして若葉が頼んだサンフレッシュは白ワインとカシスをソーダで割ったものだ。

カクテルと一緒に、本日のお薦めである有機野菜のミックスサラダやブツ切りのタコマリネ、海老とアスパラガスのピザなど適当に頼んだ。なんでも、提携している農家から毎朝採れたての野菜を届けてもらっているそう。確かに、野菜ってこんな美味しかったのだろうかと思えるほど、甘みがあつて瑞々しい。

「美味しいご飯に美味しいカクテルをいただきながらゆっくりできて、私は幸せです」
「お前は確かに幸せそうに物食うよな」

「幸せですもん。それに私、ご飯は美味しく、幸せな気持ちで食べるって決めてるんです」
御影がおかしそうな顔をしているので、思わず力説してしまふ。

「と、いうと？」

羽倉も話に乗ってきたので、若葉はどうとうと説明する。

——単純に気持ちの問題ではあるのだが、どんよりした気持ちや不貞腐れた気持ちでご飯を食べると消化に悪い。だから、美味しく幸せな気持ちで食べると決めてる——
とはいえ、本当に美味しいものを食べれば幸せな気分になるので、必然的にそうなる。すると朱利も口を挟んでくる。

「若葉の手料理、美味しいんですよ。また、ハンバーグ食べたいなあ。人参のグラッセとかマツシユポテトとかも作ってくれるんです」

「へえ、結構本格的？」

「え？ 全然そんなことはありませんよ？ 普通………かと。一人の時は、グラッセもマツシユポテトも作りませんし」

謙遜ではない。若葉の作るハンバーグは特にこれといって隠し味もない普通のハンバーグである。
「また食べたいな」

「今度泊まりに来たらね」

朱利は嬉しそうに「やったあ！」と声を上げる。いつもより笑い上戸になっているところを見ると、これは結構酔いが回ってきている。

気が付けば、入ってからすでに二時間は経過していた。そろそろお開きとのことで、一旦化粧室に行って戻ってくると、すでに他の三人は店を出る格好になっていた。若葉も慌ててジャケットを羽織り、御影達のあとについていく。お会計は、と思っただけれど、店員が愛想よく「ありがとうございます」と頭を下げたところを見ると、もう御影と羽倉が払ってしまったのだろう。

階段を上り、大通りまで来たところで御影がタクシーを止め、羽倉と朱利が乗り込む。現在二人がどういう関係かわからないので、慌てて自分が朱利を送ると申し出たが、少し酔いの覚めた朱利が「大丈夫、また来週」と笑っているので、そのまま送り出すことにした。

「羽倉さん、ちゃんと送ってあげてくださいね」

「はは、大丈夫。任せておいて」

羽倉は笑いながらそう告げると、タクシーを出発させた。

御影と二人きりになるのは、別に初めてではない。だがそれは会社の中、それもエレ

ベーターの中で偶然そうなったなどという話であって、こうやってお酒が入った状態で二人きりという展開は初めてだ。会社の飲み会の時は、いろいろな女性が彼を狙って周りを囲んでいるし、ましてやプライベートな付き合いなんてほとんどない。

それにたとえ二人きりになったとしても、物語のヒーローである御影が脇役女子の若葉をどうしようなどと考えるわけがない。自分の身のほどぐらい、自分が一番理解している。

「あ、そうだ！ 御影さん、さっきの食事代おいくらですか？ ちゃんと払います！」

「いや、いいよ。俺達の奢りだ」

「で、でも！」

鞆から財布を取り出して握り締める。誕生日など何かのお祝いでもないのに、一銭も出さないわけにはいかない。

すると御影は呆れたような顔で、若葉の額を指で軽く弾いた。

「いいんだよ。そもそも、俺達がお前らの邪魔をしたようなもんだし。ありがたく奢られとけ」

「……はい、ありがとうございます。ご馳走様です」

そう言われると、こちらも頑なに払うとは言えない。それならありがたく奢ってもらおう。もし今後、一緒に食事する機会があったら自分が奢ればいい。……そんな機会が

あればだけど。

気がつけば時刻は夜の十時近くになっていた。このまま駅へ行つて解散かな、と思ひ、隣に立っている御影に声をかける。

「とりあえず、駅行きましょうか」

「ん？ ああ……」

御影の反応が少し遅い。どうしたのかと身体を傾けて顔を覗き込んでみる——と、彼は突然、眉間に皺を寄せて、若葉の額の部分を鷲掴みにした。一体自分が何をした？と言いたくなつたが、とりあえず黙つて元の姿勢に戻る。

「御影さん……大丈夫ですか？ 酔つてます？」

「いや、全然。というか、お前も強いんだな、酒」

「そう、ですね。朱利とかに比べれば強い方だと思いますよ」

朱利と同じ量を飲んだというのに、若葉の方はまだ素面に近い。

二人で駅に続く静かな道を、少し距離を開けながら歩く。この距離が、今の若葉と御影の距離。

若葉はアルコールにそこそこ強いが、それでも飲めば多少箍が外れるらしく、普段より人に対して馴れ馴れしくなる。この時も、隣を歩く御影に触れたいと素直に思った。脇役だとか、自分なんかとか、そういった言葉は全部どこかに追いやつて。ただ、目の

前にいるこの人に触れたい。

ふと過ぎつた想いを、頭を振つて散らす。駅に着いたので立ち止まり、御影に挨拶しようとする。顔を上げると、彼がじつと若葉を見下ろしていた。なんだろうかと首を傾げると、御影が口を開く。

「お前、まだ時間平気？」

「……はい、大丈夫ですが」

「なら、もう一軒付き合え」

「え!? ……あ、御影さん！」

今度は駅を挟んで反対側の繁華街へと歩き出す。どんどん歩いて繁華街を抜け、通りを行き交う人がまばらになってくると、御影は迷うことなくあるビルへと足を踏み入れた。そのまま若葉を連れてエレベーターに乗り込む。この間お互いずっと無言だったのだ、何となくいたたまれない。どうすればいいのか。

「いらつしゃい」

「どうも」

店に入ると、マスターが親しげに声をかけてくる。

「珍しいですね、女性を連れていらつしゃるなんて」

御影は「うるさい」と言いたげに顔を軽くしかめる。どうやらここは常連らしい。マ

スターは御影の態度を気にする様子もなく、奥の窓側の席を勧めてきた。そこは窓に向かつて横並びに座れる、シックなカップルシートだった。この席に座ると、当然真横に御影が座ることになる。

さっきの店でも隣同士だったが、あそこでは二人の間にある程度距離があった。が、この席ではどう見ても、二人の肩が膝が触れ合ってしまうだろう。本当にここに座るのかと御影を見上げるが、彼は気にする様子もなくさっさとそのソファアに腰を下ろす。「何してんだ？」

「あ……いえ……」

御影はいたって平静だ。若葉は、自分の気にしすぎかと思ひ直し、彼の隣に腰を下ろす。やはりアルコールのせいだ、籐たがが外れているのかもしれない。

案の定、二人の膝が触れ合うような近さ。どちらかが少しでも身体を寄せれば肩も触れるだろう。

もう二度とこんな近くに座ることなんてないかもしれない。それならば、この状況を楽しんで方がいい。どうせ、何事もなく終わるのだから。そんな風にさえ思ってしまう。「俺はいつもの、お前は……何か飲みたいのあるか？」

「じゃあ……私は、ミモザで」

こういったバーは滅多めたに来ないが、とりあえず好きなカクテルを頼んでおく。

きつと、よくわからないから、御影さん教えてください」と言うのが、女子として正解なのかもしれない。そうすれば御影は女子に飲みやすいカクテルを注文してくれることだろう。

しばらく無言のまま、窓から見える夜景を二人で眺める。眼下ではたくさんネオンがきらきらしている。

やがて御影にはバーボンのロックが、そして若葉にはシャンパンベースにオレンジジュースを注いだミモザが届く。ミモザは世界でもっとも美味おいしくて贅沢ぜいたくなオレンジジュースと言われているらしい。確かに、飲みやすいし美味しい。何杯でも飲めてしまう。

ドリンクと一緒に出されたのは、ドライフルーツとチーズの盛り合わせ。美味しいチーズに美味しいカクテルの組み合わせは格別だ。

カランと音を立てながらバーボンを口に運ぶ御影を見て思うのは、バーが本当に似合う人だということ。落ち着きのある店内、男の人を思わせる太い腕にごつとした指、整った横顔。まるで雑誌に載っている一枚の写真のよう。

「御影さんって、お酒強いんですね」

「そうだな……。ザルとは言われているが」

「酔い潰つぶれたことってないんですか？」

「ない……、な。俺が潰れる前に、だいたい他が潰れるからな」
なるほど、と若葉は頷く。他の人より強いため、同じように飲んでいても相手が先に潰れてしまう。ただ、最近ではそこまで飲まずに退散することが多いらしい。

それから、若葉と御影は他愛もない会話をする。

「御影さんが一番よく飲むお酒ってなんですか？」

「だいたいビールだな。後は、ウイスキー……他に焼酎とかも飲むが、お前は？」

「んー、そうですね。カクテルを中心にいろいろ試してます」

飲み始めてから、数杯目。さすがに酔いが回ってきた。せいぜいあと二杯が限度だろう。

若葉はいつの間にか御影に対しやや絡み酒になっていた。拗ねたような口調で彼に問いかける。

「御影さんって、私のこと、お前って言いますよねー。私の名前覚えてます？」

「……若葉」

もし覚えていても苗字の「鍋木」だけだと思っていたため、動揺してグラスを落としそうになった。思わず御影の顔を見つめると、彼は熱のこもった瞳で見つめ返してくる。そして、火照った若葉の頬を冷たい指先で撫でてきた。

「んっ……」

「熱いな。瞳も潤んでるし、誘われている気分になる」

「そ、んな……」

酔った身体を、御影の指と瞳が一層熱くしていく。まるで、御影という存在に酔わされている気分になってきた。御影は息だけでふっと笑い、そっと若葉の頬から手を離れた。

「最後にもう一杯飲むか、何か飲みたいのあるか？」

心臓がバクバクと鳴っていて、飲みたいものが何も思い浮かばない。

「……お、すすめありますか？」

「そうだな……。なら、ポルトワイン飲むか？」

ポルトワイン。ポルトガルを象徴するワインで、最高の甘口ワインとして多くの人に愛されているお酒だ。普通のワインよりもアルコール度数が高く、食後酒としてよく飲まれている。

また、男性からこのポルトワインを薦められるのには意味がある。果たしてこれを知っている女性はどれぐらいいるのだろうか。

お酒は好きだが詳しくはない若葉が、その意味を知ったのはいつだったか。確か大学時代に、あいつから聞いたような気がする。思い出したくなくて、若葉は記憶に蓋をして答える。

「……ぜひ、それで」

御影はどうしてポートワインを薦めてきたのか。気まぐれか、本気か、それとも単なる偶然か。そして、若葉の返答をどう捉えたのか。御影の表情や態度は特に変わらない。もしかしたら、若葉がポートワインの意味を知っているかどうか、測りかねているのかもしれない。

渡されたポートワインをゆっくりと飲む。綺麗なルビー色と、フルーティーな味わい。美味しいな、と思いつつ、残りのチーズと一緒にいただいた。これだけ飲むと、さすがに少し眠気が襲ってきてうつらうつらしてくる。外に出た時に、冷たい空気で目が覚めるといいのだけど。

「若葉、行くぞ」

「へ？」

若葉が眠気と闘っている間に、御影は支度を済ませてしまっていた。慌てて出る支度をする、当たり前のように手を繋がれ、引っぱられる。

「ありがとうございます」

マスターが穏やかな笑顔で頭を下げる。若葉もつられるように頭を下げ、御影と共にエレベーターに乗り込んだ。

「お酒の代金……」

「気にすんな」

「でも……さつきも、奢ってもらったし……」

ああ、思考がうまく纏まってくれない。眠気がピークになりかけている。このままでは御影にもたれかかって寝てしまえそうだ。それはダメ。そんな迷惑はかけられない。

「むう、ちゃんと払いますー！ 私大人ですー！」

若葉は、眠気を振り払いつつ改めて主張する。

「知ってるよ、ちゃんと大人だって。俺が奢りたいだけだから」

「何ですかそれー、わけわかんないですー」

酔いが回ってきたのか、口調がまるで子どもようになる。

一方御影は、エレベーターの中で若葉の腰を抱き寄せ、熱を孕んだ瞳で見つめてくる。エレベーターが一階に着くと、ビルを出て大通りでタクシーを捕まえる。彼は若葉を車内に押し込むと、自身もそのまま乗り込み、運転手に行き先を告げた。若葉にはそれがうまく聞き取れない。御影は自分の家を知っていただろうか。

若葉は完璧に酔っ払いと化していた。御影の肩に頭を乗せて寄りかかる。意識はあるが、身体はふわふわしていた。

「御影さん」

返答はない。酔っ払いの相手ほど面倒くさいものはないだろう。どっかのビジネスホ

テルで降ろしてもらったって構わないのだけれど。そうは思っても、感情がうまくコントロールができない。

「私お酒強い方なんです……」

「そうだな。弱けりゃバーに行く前に潰れてるだろうしな」

「……だから、お持ち帰りってされたことないんです」

運転手がいることはわかっていたが、若葉は構わず自分を晒け出す。

大学時代からそれなりに飲み会に参加していたが、いつも潰れることなく帰宅していた。けれど同級生の中には、カクテル二、三杯で「酔っ払っちゃった」と可愛く言っただけで帰った男子を持ち帰る女の子もいた。持ち帰られると見せかけて、女子が持つて帰っているというパターンもあるのだ。

その子達は揃いも揃って「若葉もお酒弱いふりしなきゃダメだよ！」なんて言ってきた。

だけど、最初の段階で酒に強いと知られてしまった以上、そんな真似をしたら狙いはバレバレだろう。それに、酔っぱらったふりをして結局何もなかった時のことを考えると、とてもじゃないが実行に移す気にはなれなかった。

自分がモテるところか、女子として見られること自体少ないのは自覚している。そんな若葉が女子として恋のフラグを立たせるには、勇気が必要だった。それが酒の上での

勇気だったとしても。

「私、ポトワインの意味……ちゃんと知ってますよ」

斜め上にある御影の顔を見つめる。御影は少し驚いた顔をしていた。

男が女にポトワインを薦める意味は、今夜は帰したくないだ。女がそれを受け入れて飲む意味は、あなたにすべてを。もし断る場合はブルームーンを頼む。ブルームーンの意味は、できない相談。相手を振るという意味になる。

御影の返答はない。やはり単なる気まぐれだったのか。それとも彼にしてみれば意味なんてなかったのか。結局お酒の力を借りた勇氣は無駄に終わるのか。

泣きたくなる。悔しさからなのか、悲しさからなのかはわからない。もしかしたらどちらともか。

酔った頭で思うのは、この人が最初の人になってくれるといいのに、ということ。無愛想で口が悪くて——でも優しい人だから。

若葉は、二十六歳にしてまだ未経験だ。こんな自分でも、たった一夜なら大切に抱いてくれるかもしれない。愛し合っているような錯覚を味わわせてくれるかもしれない——

なんて自分勝手に卑怯な考え。我ながら呆れてしまう。けれどその想いは、湧き上がる泉のように心の奥底から溢れ出てくる。

彼はまだ何も言ってくれない。
 そんなに自分には魅力がないのだろうか。そんなに、女に見えないのだろうか。
 どうしようもないほどに、惨めだ。

もう考えたくはなかった。悲しいのも苦しいのも惨めなものも嫌だった。

お母さん、だなんて言われて、いつも周りを宥めて面倒を見て、何を言われても笑って受け流しながら、自分一人で傷ついている。

若葉はいつの間にか目を閉じて寝息を立てていた。ふと片目から一滴の水が零れる。

「……帰すわけないだろ……っ」

意識の沈んでしまった若葉は、御影が切なげに呟いた言葉を聞くことはなかった。

身体がふわふわと浮かんでいる気がした。お酒と煙草の匂いがかすかに鼻をくすぐる。煙草の匂いは少し苦手だけど、何故かあまり気にならない。

若葉は、そばにあった温もりにすり寄った。気持ちがいい。この温かいものは一体なんだろうか。

ほんやりと目を開けると、切れ長の黒い目が視界に入る。

「起きたか」

「……う？」

「寝ぼけてんな……、まあいい。おい、若葉」

「ん……」

「タクシーでのこと、了承と取るからな」

タクシーでのこととは一体なんだろうか。唸りながら思い出す。

（ああ、多分ポートワインのくだり）

これはきつと夢だろう。だって御影が自分を女として抱くと言っているのだ。夢以外の何でもない。だけど、嬉しい。おぼろげな意識の中ではにかみながらも微笑み、頷いた。

「お前、煽りすぎだ……っ」

「んあ……」

唇が塞がれる。最初は軽く触れるだけだったけれど、やがて啄まれ、挟まれる。促すように舐められて、震えながらもかすかに唇を開くと、口づけはさらに深くなる。

本来なら目を瞑ってするだろうキス。けれど若葉と御影は、お互いを真っ直ぐ見つめたまま唇を合わせる。御影の瞳に自分が映っていることに、ぞわりとした。

そう言えば、これがファーストキス。二十六歳になるまでファーストキスすら済ませていなかったなんて、朱利にも言えない。もっと早くしていれば良かった。こんなに気持ち良いものだったなんて。でもそれは、きつと相手が御影だから。

彼の赤い舌が、若葉の口の中へとねじ込まれる。ぬるぬるとして熱いそれは、若葉の口蓋や頬の裏を丹念に、まるで確かめるように這っていく。敏感な舌の上を擦られ、溢れる唾液を吸り上げられると、ぞくぞくとした痺れが身体を支配した。

「……んんっ……」

御影の手が若葉のシャツのボタンを性急に外していく。今にも引きちぎらんばかりのその手つきは少し怖いくらいなのに、絶え間なく与えられる口づけはどこまでも優しい。シャツの前が開かれて、キャミソールをたくし上げられる。今日の下着は何色だったか、上下セットだったか。そんなことが頭を過ぎるが今更だ。

ブラの上からもわかるほどに尖り出した頂に、キスをされる。それだけで腰がびくんと震えてしまう。まだ始まったばかりなのに、これではどこまで持つのかわからない。

御影は若葉の反応を確かめながらブラを持ち上げ、胸の膨らみに舌を這わせると、痛いぐらいに吸い上げた。

「……っ」

「綺麗につくな。この痕を花だと例えるヤツがいたが、なるほどな……。こうして見ると確かに花が咲いたみたいだ」

そう言って舌舐めずりしながら、そこを指でさする。胸元に目をやると、赤い痕がくつきりといっているのが見えた。薄れる意識の中でこれがキスマークなんだと納得

する。

「身体、少し浮かせる」

「は……い……」

御影の声はまるで麻薬のようで、色気を含んだ低い音が耳を犯す。

腰を支えられながら身体を浮かせると、腕に引つかかっていたシャツを抜き取られ、キャミソールも脱がされる。ごつごつとした指で背中を撫でられ、器用にブラのホックを外された。その手際の良さに、こういうことに慣れていいるのかな、とぼんやり思ったけれど、気付かないふりをする。気にしたら何も始まらない。

腕からブラを抜き取られ、初めて男性の目に自分の裸を晒す。恥ずかしさと熱に浮かされながら御影を見上げると、彼は目を細めて若葉の身体を愛撫する。

「これは、堪らないな。吸い付くみたい手に馴染む」

胸の膨らみを下から持ち上げ、やわやわと揉み、痛いぐらいに尖った若葉の頂を人さし指で円を描くように撫でる。まるで焦らされているようで、もっと強くとねだりたくなる。

小さく息を吐きながらその弱い愛撫を受け入れていると、突然彼の手の動きが激しくなる。片方の頂をぐにぐにと指で挟んで揉んだかと思うと、もう片方を熱い舌で丹念に舐め始めた。

「ひああ、あつ……！ い、きな、り、っ」

思わず腰を浮かせる。その瞬間、そこを強く吸い上げられた。身体の芯に甘い疼き^{うず}が駆け上がり、若葉はシーツを足で搔く。

続いて御影は首筋や鎖骨にも唇を這^よわせ、服に隠れるか隠れないかという際どい部分にも痕^{あと}をつけていく。まるで自分の所有物であると主張するかのよう。それは胸の谷間や胸の下、お臍^{へそ}にまで達し、若葉の身体の至るところに赤い花が散る。

ふと、スカート越しに臀部^{でんぶ}を撫^なでられ身体が震える。だが御影はお構いなしにファスナーを下ろしていく。

「若葉、腰……」

「うあ……」

脳内を直接刺激するような色気のある声^{こゑ}が耳元で囁^{ささ}いてくる。

若葉が腰を浮かせると、ストッキングごとスカートをずり下ろされた。スカートはそのまま床に投げ落とされたが、ストッキングは中途半端に片足首に引っかかっってしまう。「全部脱がせるより、こっちのほうがエロいな」

「うー、いじわる、しないでください……っ」

「悪い悪い」

御影は楽しそうな笑みを零^{こぼ}してストッキングを足首から抜き取ると、足首からふくら

はぎを往復するように撫でた。若葉はまたビクンと震える。

「んんっ」

「お前はどこもかしこも性感帯みたいだな」

「わ、かんない……ですっ、あ、あっ」

御影は若葉の片脚を持ち上げ、膝^{ひざ}の裏側をべろりと舐めてから、ちゅっちゅっ音を立ててキスをする。彼の唇はそのまま太ももを辿^{たど}っていき、脚の付け根を強く吸った。若葉は太ももを閉じようとしたが、間に入り込んできた御影の身体に阻まれてしまう。

彼の視線がどこに注がれているのか、経験の少ない若葉にもはつきりとわかる。

「そ、んなところ……っ、見ないで、ください……」

「それは聞けないな」

そう言いながら、御影は下着越しに若葉の秘所を何度も指で擦^{こす}る。するとそこは次第にぐちゅりと湿った音を立て始めた。若葉は恥^はずかしさにもがきたくなるが、火照^ほった身体はうまく動かない。そんな若葉に構わず、御影は下着の上から丁寧^{ていねい}に秘所^{ひそ}を解^ほす。

「ん、ん、っ」

唇から溢れそうになる甘い声。若葉は手の甲で唇を押さえ必死に我慢していたが、御影は眉間に皺^{しわ}を寄せながら、その手を取ってシーツに縫^ぬいつける。

「ああっ、や、こえ……でちゃうっ」

「いいから、ちゃんと感じてる声聞かせろ。俺しか聞いてない」

その御影さんに聞かれるのが恥ずかしいのだ」と反論しようとしたが、未だ止まらない愛撫のせいで言葉にならない。愛液でぐちゅぐちゅに濡れた下着に御影の指がかかり、若葉に見せつけるかのようにゆっくりと下ろしていく。その様はあまりにも卑猥で、若葉の身体は余計に熱くなる。

御影はここでようやく自身のシャツを脱ぎ捨てた。そしてまた身体を屈め、若葉の秘所に指を一本、埋め込んでいく。

「いっ……っ……」

「痛いのか？」

初めて受け入れた異物に若葉が呻くと、御影は指を抜いて心配そうに尋ねる。

「だ、いじょうぶ……ですっ」

「若葉……、お前もしかして、初めてか？」

これ以上熱くならないと思っていたのに、御影の言葉を聞いて若葉の全身はさらにカッと熱くなった。それだけで御影は答えを察したのだろう。

「それなら、もつと解さないとお前が辛い」

御影の口調からは、若葉が処女であることを面倒くさがる様子も、特に喜ぶ様子も窺えなかった。ただ、「解さないと」のあたりで声が少し弾んだように聞こえたのは、

きつと気のせい。願望ゆえの空耳。

そう、これは若葉が見ている「願望」という名の夢の世界。

そうでなかったとしても、若葉の願望が現実の色をつけていることは間違いない。だって、若葉を見つめる御影の瞳がこんなにも優しく見える。

御影は若葉の太ももを抱きかかえると、またゆっくりと秘所に指を埋め込み、ゆるゆると馴染ませるように膣壁を擦っていく。

若葉は、はっはっとして短く息を吐きながら、優しい愛撫に身体がどんどん疼いてくるのを感じた。

「もう一本増やすぞ」

近くにいるはずの御影の声が、どこか遠くから聞こえてくる気がする。

穏やかな愛撫がもたらす優しい快感。それがむしろもどかしい。

もつと、強くしてほしい。もつと、激しくしてほしい。奪うぐらいで構わない。

だが御影の手は変わらず緩慢だった。増やされた指は膣内で蠢き、何度も挿挿を繰り返す。やがて先ほどより解れただろうそこに、突然生暖かい風を感じた。

「ひあっ、な、に……」

驚いて下腹部のあたりにいる御影に視線をやると、彼は秘所に顔を近付けていた。思わず身体を上にもずらして逃げようとしたが、力強い腕に太ももを押さえられてしまう。

おまけに脚を頭の方へ持ち上げられ腰を浮かせたまま固定されてしまい、誰にも見られたことのないそこを御影に見せつけるような形になった。

「や、や、それっ、やあ……っ」

「大丈夫だ、気持ち良くなるだけだから」

「あ、あ、あっ」

尖らせた舌が、入り口部分をねっとり上下に往復する。それを何度も繰り返した末に、溢れ出してきた蜜をじゅるじゅるっと音を立てながら吸い上げられ、舌をねじ込まれる。

「ひあああつつ、あ、ついい」

どこもかしこも、熱すぎる。熱いのは御影の舌か、自分の身体か、それともその両方なのか。頭を振りながら若葉は快楽を逃がそうとするがうまくいかない。

御影の唇が花芯を優しく挟み込み、舌でちろちろと舐める。頭が真っ白になりそうな快楽が怖くて堪らない。この行為はどこまで自分の脳を溶かしていくのか。

「き、きちゃう……み、かげさん……なんかきちゃうっ」

足のつま先から何かが勢いよく駆け上がってくる。耐え切れそうにない何かに、翻弄されている。

御影が息だけでふっと笑う。それが花芯にかかり、若葉の喉からは「ひっ」と小さな

声があがる。

「イキそうなんだな、怖がらないでイっていい」

じゅうっと大きな音をたてながら、強く花芯を吸い上げられた。

先ほどまでの優しい愛撫とはうってかわって、御影の舌は容赦なくそこを撾る。

「あっ、ひ、うああ、あ、あ……っ。あああああ……」

若葉は腰を痙攣させて、ひときわ高い嬌声を上げた。目の前がチカチカして、涙で御影の顔が歪んで見える。

一度達した若葉は、ぐったりと肢体を投げ出してゆっくりと息を整える。わずかに身体は動くが、とてもだるい。これがイクということなのか。

消えそうな意識の中で、かすかにガチャガチャという金属音や袋を破くような音が聞こえてくる。頭の隅で何の音かと思っただけで、それを確認するために上半身を起こす力はなかった。

重い片腕で目元を覆い、息を整えようと深く吸って吐いてを繰り返す。

何とか息が落ち着いてきたところでギシッと足元に重みが加わる。それから両腕を掴まれて、シーツの上に縫い付けられた。

目の前に現れたのは、赤い舌をチラリと見せた御影。彼は、今度は若葉の鼻を軽く舐める。

「んっ……」
 「解^{ほく}れたし、そろそろ……いくぞ」
 そう言うと、御影は滑りを良くするように肉茎を数回秘所に擦りつけ、未だ誰も受け入れたことのないそこに、先端を少し押し込める。
 「あつ、ひうつ……」

これから起こることへの恐怖に身体がわずかに強張^{こわば}ってしまふ。視線を彷徨^{さまよ}わせると御影は蕩けるような笑みを浮かべながら、触れるだけの口付けを落とす。

「俺を見ろ」

「みか、げさん……」

御影は恋人繋ぎのように指を交差させて若葉の手を握ると、腰を押し進めた。

「若葉……っ、くっ」

指とは比べ物にならないほど太いものが、若葉の膣内へと挿入されていく。どれほど解され濡れそぼったとしても、初めての痛みがなくなるわけではないらしい。若葉はあまりの痛さに息を詰め、涙を流しながらいやいやと首を振った。

やめてほしい、抜いてほしい。だけど御影のために耐えたいとも思う。相反する二つの気持ち^{こころ}が若葉の中でせめぎ合う。

「いつ、あ、あ、うっ」

「若葉、息吐け、止めんな」

「む、りいつ、いたい」

まだ途中までしか入っていないのに、膣壁を押し^{ひら}抜られる痛みと圧迫感で、お腹が苦しくて堪^たまない。両目を強く瞑^{つむ}り、繋いでいる手を強く握り締めると御影の手の甲に爪が食い込む。

「見ろ、若葉。俺をちゃんと見ろ」

「うー、うーっ」

次から次へと涙^{なみだ}が零^{こぼ}れていき、うまく言葉が紡^{つむ}げない。それでも言われた通り^{まふた}瞼^{まぶた}を上げ、霞^{かすみ}んだ目で御影を見つめた。

御影の顔がすぐ目の前にある。乱れた黒髪が頬に当たり、ぼたつと汗が一粒、若葉の顔に落ちてくる。優しい口付けが、額^{ひたい}や鼻、頬と顔中に降ってくる。すると若葉の喉の力が少しづつ抜けていき、やっとともに息ができるようになる。

「口開ける……」

「は、い……」

唇を開くと、熱くて肉厚な舌が若葉の口腔^{こうくう}へと侵入してくる。口蓋^{こうがい}を丹念に舐め直し、舌を擦り合わせ、若葉の身体の力が抜け切ったところで一気に奥まで突き入れた。

「んーっ、ん、んっ、んー」

立ち読みサンプル はここまで